

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

# RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

https://www.kwansei.ac.jp/c\_rcc/ TEL:0798-54-6019

## RCC 主催講演会

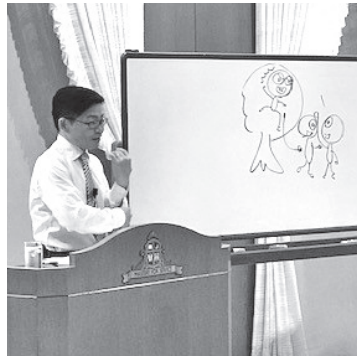
共通テーマ

「キリスト教学校が若者に何を伝えていけるのか」

### 「木の上」にまで届く声

〜ザアカイ物語を通して

講師 青山学院大学法学部教授 塩谷 直也氏  
 報告者 RCC 主任研究員 大宮 有博



二〇一九年六月二一日に関西学院会館光の間において「キリスト教学校が若者に何を伝えるか」というテーマで講演会を開催しました。講師として塩谷直也氏（青山学院大学法学部教授、大学宗教部長）をお迎えしました。塩谷先生は愛知県と東京都の教会で牧

師をされながら、キリスト教学校で聖書科を担当されています。そして二〇〇八年から青山学院大学にお勤めになられています。先生の著書『迷っているけど着くはずだ』（新教出版社、二〇〇〇年）は、私も繰り返し読んでいます。また昨年出たばかりの『視点を変えてみれば 一九歳からのキリスト教』（日本キリスト教団出版局、二〇一九年）も興味深く読みました。

\* \* \*

さて、塩谷先生はお話の冒頭で唐突に、「夢」とか「生きがい」という言葉をあまり使わないようにしていると述べ

られました。夢がないと生きられないわけではありません。夢や生きがいよりも前に、自分が生きていくこと、命があることを、感動をもって受け止められることが大切なことではないでしょうか。それがまずあるべきことではないか。それなしに「夢」や「生きがい」を問う日本の教育は、若い人を追い詰めているのではないのでしょうか。

そんな息ぐるしさから逃げられる場所を用意すること、そして逃げてもいいんだよってことを教えることも大事じゃないでしょうか。災害でも、事故でも、事件でも、逃げることで生き延びられたひとたちが、生き延びたことへの喜びよりも、自分が生き残ったことへの後悔で自分を責め続ける、胸が引き裂かれるような思いに今も苦しんでいます。大切なのは、罪の赦しの宣言なのです。十字架から発せられる罪の赦しの宣言を待っている人たちが、生き延びた人たちのなかにいるのです。ザアカイは、生きる根源的な

喜びから離れていました。逃げることもできないし、逃げたことで裏切った人もたくさんいたでしょう。彼は相当悪いことをしてきたみたいですから、相当な罪責感の中になります。

ザアカイはイエスを一目見たいという気持ちでイチジク桑の木に登ります。しかしザアカイがイエスを発見するよりも先に、イエスがザアカイを発見していたのです。そのことはイエスがすでにザアカイの名前を知っていたことから明らかです。さらに言うところ、イエスはザアカイに語りかける前に、すでにザアカイを愛していました。キリスト教学校はその日常に、イエスを見ようとする者がすでに「見られている」ということ、そしてイエスはすでにその人を愛しているということを通して漂わせていくべきです。礼拝堂でも、キャンプでも、そこに来るとイエスの温かいまなざしを感じられる雰囲気を感じたいのです。そして学生がイエスのまなざしを通して少しずつ成長して

いくことこそが、キリスト教教育なのではないでしょうか。

さらにイエスはザアカイの家に一泊します。ザアカイの家に立ち寄って、ちょっとだけ話を聞いたではありません。なんと一泊したのです。イエスとザアカイが何を話し合ったかはわかりません。でも、きつとイエスは人生で深い傷を負ったザアカイの話を聞いていただけでなく、一緒に答えを探したのではないのでしょうか。

\* \* \*

先生はお話が始まる前に、「メモを一生懸命取らなくてもいいですよ。本当に大切な言葉は毛穴から入ります」とおっしゃいました。その一言だけで、はっとしました。本当にそうだと思います。そして軽快なお話とともに、正面に置かれたホワイトボードにさらさらとマンガを描いていききました。あっという間に会場に満杯の聴き手は、「塩谷ワールド」に引き込まれていきました。講演の後会場からは次々と質問の手が上がり、定められた時間は瞬く間に過ぎ

てしまいました。

キリスト教学校が大切にしなければいけないことを考え

るヒントを提供して下さった塩谷先生に心から感謝申し上げます。

## 「銀の滴ふるふるまわりに

— 知里幸恵と聖書の神 —

講師 立教大学文学部教授 西原 廉太氏

報告者 RCC主任研究員 橋本 祐樹



二〇一九年一月一日(月)に関西学院会館光の間において前述の主題で講演会を開催しました。講師として西原廉太氏(立教大学文学部長・文学研究科委員長・立教学院副院長、キリスト教学校教育同盟理事長)をお迎えしました。

講演題にある知里幸恵の話に進むに先立って、講演前半ではまずその前提となる話を取り上げられました。すなわち英国聖公会の北海道宣教に従事

したジョン・バチェラー、その影響下で成長したアイヌのバチェラー八重子、そしてその弟である向井山雄についてです。一八七七年にバチェラーは北海道の函館に聖公会の宣教師として着任します。当時の日本政府は改名や日本語の強制等、アイヌの人々に対する同化政策を取っていたわけですが、彼はそれに抵抗し、教会の設置に加え、アイヌ語辞書の作成、アイヌ学校や診療所等の設置を行います。このようなバチェラーの活動に触れて影響を受け、洗礼を受けるアイヌの人々が多く出たようで、当時の北海道聖公会の信徒の大半はアイヌの人々でした。

そういった人々のうちの

人がバチェラー八重子です。金田一京助にも評価された、日本文学の領域では知られた重要な歌人です。彼女はバチェラーの養女となった人物で、聖公会の女性伝道師でもありました。同時に歌人としてアイヌの人々のアイデンティティについて和歌を通して表現しました。「亡びゆき一人となるもウタリ子よこころ落とさで生きて戦え」。これは彼女の有名な歌の一つです。ウタリとはアイヌの同胞を指しています。

彼女の弟にあたるのが日本の社会運動史においても知られたアイヌ解放運動の指導者であり、やがて立教と聖公会神学院を卒業してアイヌ初の聖公会の司祭になった向井山雄でした。バチェラーは宗教的な領域に留まらず、このような社会的・文化的な領域での指導的人物をも生み出していくわけです。

後半に取り上げられたのが表題にもなった知里幸恵の生涯でありその作品です。彼女は一九〇三年に生まれ、病弱な母に代わって旭川の聖公会の教

会で伝道師をしていた伯母の金成マツに育てられます。この人はアイヌのユーカラ(アイヌ神謡)の著名な伝承者でもありました。彼女を通してキリスト教信仰とアイヌのスピリットを受け継ぎ、知里自身もユーカラの伝承者になっていきます。知里は勉学にも熱心で、読み書きに優れていたという点は、文字の文化を持たないアイヌの人々の中でも特別な意味を持ちました。バチェラーを通して彼女と出会った金田一京助はこれに驚き、東京でのアイヌ神謡集の筆録作成を持ちかけます。逡巡の後、この申し出を受けることを決意して東京での筆録と翻訳に取り掛かります。

彼女が筆録作成に選んだのは一三編のユーカラでしたが、そのうちのひとつが「銀の滴降る降るまわりに金の滴降る降るまわりに」でした。すべてのユーカラをローマ字にして音を起こし、それを平易で洗練された日本語にするその作業を終えた直後に、彼女は持病の心臓病のために一九歳の若さで世を去ることになります。

彼女が最も大切にしたそのフクロウの神のユーカラは次のように始まります。

『銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに』という歌を歌いながら子供等の上を通りますと、(子供等は)私の下を走りながら云うことには、『美しい鳥！神様の鳥！さあ、矢を射てあの鳥、神様の鳥を射当てたものは、一ばんさきに取った者はほんとうの勇者、ほんとうの強者だぞ』。

そのように云いながら「お金持ち」のこどもたちは金の弓矢でフクロウを狙いますが、フクロウはそれらをかわしません。一人の「貧乏の子」もここにいて、彼もフクロウを狙います。彼の弓矢はみすばらしい木製のものです、周囲の子らはそれを笑い、当たるはずもないと足蹴にします。それでもフクロウを射ようと構えるその子を見て、フクロウの神は不憫に思いました。ユーカラはこのように続きます。

『銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに』という歌を歌いながらゆつくりと

大空に、私は輪をえがいていました。貧乏な子は、片足を遠く立て片足を近く立てて下唇をグツと噛みしめて、ねらっていて、ひょうと射放ししました。小さい矢は美しく飛んで、私の方へ来ました。それで私は手を差しのべてその小さい矢を取りました。クルクルまわりながら私は、風をきって舞い下りました。

ごく日常的な世界に神を見出していたことを告げるこのユーカラ自体に豊かな味わいがあるように思いますが、小さくされた者のために矢を「取った」フクロウの神の姿に知里はイエス・キリストを重ねていたのだろう、と西原氏が語っておられたのは特に印象に残っています。講演の最後に、キリスト教育の核心の一つはまさにこのような人々についての学びにある、と言われていたかと記憶します。興味のある方は先述した知里の手によるユーカラ選集『アイヌ神謡集』(岩波文庫、一九七八)をぜひ手に取って読んでいただければと思います。

## キャンパスの中のキリスト教シンボル (13)

RCC主任研究員 梶原 直美



今回のシンボルは、西宮聖和キャンパスに属する一号館とその屋根の上に設置されたオーナメントが対象です。西宮聖和キャンパスのなかで、大学教育学部と短期大学の学生たちが学ぶ学舎は、図書館も含むと現在、一〇棟を数えます。このうちの数棟は、聖和大学時代、一九九五年の阪神淡路大震災によって激しい損傷を受け、建て替えが計画されました。一号館もそのひとつです。一号館の屋根の東西両側は塔のような形状にデザインされ、それに伴ってシンボルがつけられることになりました。そのテーマは、創世記に登場するノアの物語に基づいて、箱

舟が選ばれました。洪水とノアの箱舟の物語はよく知られています。ノアが、神のことに従って洪水への備えとして巨大な箱舟を作り、そこに家族と、動物や鳥たちを入れて助かったというストーリーです。聖書によると、洪水は一五〇日間降り続いた雨によるものでした。この長期間の雨が上がり、洪水が引くと、ノアたちは再び大地を踏みしめ、神に献げ物をします。そこで神は、洪水を起こさないことを、虹によってノアに約束しました。その後、ノアの子孫は繁栄することになります。また、資料を提示するには至りませんでした。一号館の建物自体がノアの箱舟をイメージしてデザインされたとの説もあります。そうであれば、これもまた、震災を経験後に再開した歩みを忘れないためのモニユメントの役割を果たすものなのか



もしれません。

以上のように、これらは、災害の悲惨さとともに神の恵みに常に目を留めることを思い起こさせるシンボルと言えるでしょう。なお、今回の記事執筆に関して、聖和短期大学宗教主事の小見のぞみ先生より貴重な資料を提供していただきました。感謝申し上げます。(参考資料: 『聖和大学報』四八号「一九九五年七月」、五一号「一九九七年一月」、五二号「一九九七年七月」)

## 映画とキリスト教 (4)

『100歳の少年と11通の手紙』

(製作：二〇〇九年、仏他 監督：エリック・エマニュエル・シュミット)

RCC センター副長 加納 和寛

## ◆ストーリー

白血病を患い、小児病棟に入院している10歳のオスカーは、自分の余命が幾ばくもないことを知ってしまう。主治医からオスカーの話し相手になるよう頼まれたオープンな性格の宅配ピザの女性ローズは、オスカーに「一日ごとに10歳ずつ年をとると考えながら、神様宛てに毎日手紙を書くこと」を勧める。手紙はいつもローズによって病院の庭から風船で空へ上げられたが、内容は事前にコピーされて主治医や両親に渡されていた。

## ◆手紙を書くということ

オスカーの心を開くため、ローズはオスカーに神様への手紙を書かせようとする。だがオスカーはすぐには承知し

ない。「なんで神様なんて言うの？サントにはだまされた。一度で十分だよ」「神様とサ

ントは関係ないわ」「同じさ、両方ともインチキ」「一六五戦一六〇勝の元プロレスラー四五KO勝ちの私がサントを信じる？ありえない。でも神様は信じてる」。この後何度もローズは、過去のプロレス試合のことを面白おかしく語って聞かせる。オスカーはそのたびに話に引き込まれ、ローズの勧めることを受け入れる。しかしローズのプロレスの体験談は、実はすべて作り話である。人間は話の内容を信じるのだろうか。それとも話すその人を信じるのだろうか。

## ◆痛みの問題

オスカーがほのかな想いを

寄せる、入院仲間であるペギーの手術の日が来た。手術室に向かうペギーを見ながらオスカーはローズに言う。「なぜ病気に？神様は意地悪なの？ドジなの？」ローズは答える。「オスカー、病気は死と同じ。ひとつの事実で、罰じゃない」。ローズはオスカーの問いに答えていない。現実を理屈だけで処理しようとしても、当事者の痛みが癒えることはない。オスカーはこれに鋭く切り返す。「ローズは元気さ」。健康なローズの、当事者の観点の欠如を指摘する。しかしローズは血相を変える。「偉そうに！私は元気で毎日楽しんで、病気をせず死なない？」実はローズの生活は苦しく、家族とはうまくいっていない。ローズもまた、なぜこの私が苦しまなければならないの？と問う子どもなのだ。オスカーは優しい声で言う。「ボクに何かできる？ボクの子どもになる？」そう、誰でも、子どもものようにならないければ、「苦しみと

愛の本質にふれる領域、神の国への一步を踏み出すことはできない。そして放蕩先からぼろぼろになって帰って来た我が子を抱きしめようと待っている慈しみ深い「父」は、実は私たちのすぐ側にいるのかもしれない。いや、誰でも誰かに対して「父」になれるのかもしれない。

## ◆信仰と死

死が「怖い」と打ち明けたオスカーを、ローズは近くの礼拝堂に連れて行く。キリストの磔刑像を指さして「神様よ」。オスカーは不服そうだ。「違だよ。元プロレスラーでチャンピオンのローズがこんなものを信じるの？」ローズは質問する。「それじゃ筋肉ムキムキの神様なら信じる？どっちが身近？何も感じない神様と苦しんでる神様と」。オスカーは答える。「苦しんでるほう」。ローズは苦しみを説明する。「苦しみに二つあるの。肉体的な苦しみと心の苦しみ。手と足

にクギを打たれたら痛みからは逃れられない。反対に死ぬと思つて苦しむことはないわ。自分次第よ。神様は死ぬことを苦しいと思つてないの。」「人は未知のことが怖い。けど未知って何？オスカー、未知に直面しても、恐れないうに。」

現代の神学者J・モルトマンは、全能の神は苦しむことを選び、それゆえ人を愛する神であると主張する。愛ゆえに人と一緒に苦しむ神に出会ったオスカーは、最期の日々にベッドの枕元の机に置いたカードにこう書いていた。「ぼくを起こしていいのは神様だけ」。

## 編集後記



塩谷直也氏と西原廉太氏によるご講演は、キリスト教学校の存在意義と使命を確認するうえでも大変示唆に富むものでした。(T.O.)